

阿久津光之会長 2 期目へ

小樽市医師会
おたるイアクリニック

鈴木敏夫

平成29年6月2日に小樽市医師会第148回定時総会が開催され、阿久津光之会長が再選され2期目のスタートとなりました。近藤真章、大庭久貴両副会長が退任され、それぞれ相談役、幹事長となられ、新副会長には、小樽協会病院長である柿木滋夫先生が就任され、鈴木敏夫も副会長を拝命しました。新理事に就任されたのは、越前谷勇人先生、大本晃裕先生、松島久先生、和田卓郎先生の4名です。小樽市医師会に若い新鮮な風をもたらしていただけると期待しています。長らく小樽市医師会を支えてくださった谷口博先生、長谷川格先生、馬淵正二先生が、それぞれ監事および理事を退任されました。理事会を離れても貴重なご助言を頂けることを願っています。

さて、次の数字をご覧ください。810→780→758→723→740→688→657→647→623→604→512。何らかのカウントダウンのようですが、小樽市の2006年から2016年までの出生数の動態です。1975年に3,268人という出生数を記録した同じ自治体ということが、にわかに信じがたい数字となっています。同じく人口は、1964年に207,093人となっていますが、2017年5月末では、119,882人となりました。かつての20万都市は、今や10万都市どころか10万人を下回ることは確実な情勢です。

国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口で

は、2020年に112,113人、2025年に102,199人、2030年に92,396人、2035年に82,914人、そして2040年には73,841人とされています。

市内小中学校の統廃合、道立高校の学級減が追いつかないほどの児童生徒の減少は明らかで、最近3校が統合されたばかりの新しい小学校の1年生が1学級という、驚くべき事態となっています。

休日当番あるいは小樽市夜間急病センターへ出向する開業医の高齢化も進み、いつまで現在の体制を維持できるかが問題となっています。小樽市が属する後志二次医療圏においても状況は同様です。

小樽市医師会では、大庭前副会長を委員長とする小樽市医師会地域医療構想委員会にて、昨年3月に後志圏地域医療構想に対する意見「後志二次医療圏における地域医療構想策定に対する考察と提言」を北海道後志総合振興局に提出しています。「医療における2025年問題」は、全国の大都市の状況、特に隣接する札幌市の状況とは大きく異なっています。小樽市には、中心部に公立およびそれに準ずる4病院があり、重なる診療科があるものの、それぞれ特色を生かして診療していますが、現在の各病院の病床体制がいつまで持続できるかも問題となります。

小樽市は後志二次医療圏であると同時に、現在200万都市である札幌市と隣接していることを考えると、人口の縮小のみが目立つ後志の動向ばかりではなく、札幌市の増加する高齢者の受け皿としての目線も必要になると思われ、柔軟な医療体制の構築が要求されています。

阿久津会長は、自ら収集し整理した医療政策・医療情報のデータで、パソコンのハードディスクが一杯になってしまうぐらいの勉強家、そして医療政策通でもあります。手帳に余白がないほどの過密スケジュールで行動されていますが、これからの2年間も小樽後志の医療を率先してリードいただけると確信しています。



平成29年度・30年度 小樽市医師会 役員 平成29年6月14日 於 ニュー三幸